

学術懇話会

Academic Forum

平成18年2月23日(木)

February 23, 2006

16:00~17:10

16:00~17:10

情報科学研究科棟 大講義室(2階)

Lecture Hall 206

主催 東北大学大学院情報科学研究科

情報科学研究科学術懇話会

日時：平成18年2月23日（木）

場所：情報科学研究科棟 大講義室（2階）

プログラム

16:00 開 会

総合司会 学術振興・広報委員会幹事 宗政 昭弘

16:05 挨 拶

情報科学研究科副研究科長 西関 隆夫

講 演

16:10 「すべては計算から始まる」

講演者 丸岡 章 教授

司 会 堀口 進 教授

17:10 閉 会

17:30 パーティー

（情報科学研究科棟 中講義室）

● 変革の時代と研究第一主義 ●

大学の制度や組織は大きな変革の時代に入ったと言われてから久しいですが、いつの世にも変わらないのは大学は研究をする所、という決して変えてはならない不文律です。法人化を初めとする変革の時期を乗り切って、情報科学研究科においてこの不文律を守ることに尽くして来られた先生からお話を拝聴できることは、我々が今後情報科学の研究・教育にどのように取り組んで行くべきか、また今後起こるであろうさらに大きな変革の波に対処して行くヒントを得る貴重な機会ではないでしょうか。

学術振興・広報委員会 幹事 宗政 昭弘

学術懇話会 – 第7回開催にあたり –

東北大学大学院情報科学研究科
副研究科長 西関 隆夫

本研究科は、情報科学を自然科学系の分野としてだけでなく、人文・社会科学系の分野にもまたがる、先端的かつ総合・学際的な基礎学問として育成・発展させることを理念・目標として平成5年に創設され、本年で13年目を迎えます。この間、インターネットを中心とする情報通信技術の進展、さらには国際化、多様化、大学の独法化など本研究科を取り巻く社会の変化には著しいものがありますが、本研究科の理念・目標はかえって目新しくさえあり、その責務は極めて大きいといえます。

本日講師としてお迎えする本研究科長の丸岡章教授は、研究科の設立メンバーであり、設立当初より研究科の研究・教育の方向と発展に対して弛まぬご努力をされております。とりわけ平成16年に研究科長に就任されてからは、研究科の理念・目標を達成するためには、個々の研究者が目指すべき研究目標を独自に発想し、研究科はその発想を研究科の戦略としてくみあげ育てあげる仕組みをつくる必要があります、それが研究科としての高い潜在能力を存分に生かすことに繋がるという構想をおもちになり、永年の研究活動に対する姿勢同様、実に緻密にかつ着実に研究科の運営にあたってこられました。就任早々、研究科構成員との個人面談など新しい試みを通し、個々の研究科構成員の意識を正確に捉え、研究科の理念・目標の達成に真摯に取り組んでこられました。また、昨年9月には、丸岡研究科長の強力なリーダーシップの下、“Information Sciences of New Era: Brain, Mind and Society” のタイトルで国際シンポジウムが開催されました。世界各国の多岐にわたる分野の第一線で活躍される研究者を招待し活発な議論や意見交換がなされ、正に本研究科の理念・目標に相応しい国際会議になりました。

丸岡章研究科長の本日のご講演には、これまでのご経験そして今後目指すべき研究の方向性など、我々が踏襲すべく事柄が多々あるはずです。この貴重な機会を決して無駄にすることなく、是非とも将来の情報科学研究科の発展に役立てていただきたいと切に願います。

講演要旨－「すべては計算から始まる」

丸岡 章 教授

実験が主流の研究室の片端でひとりほそそと計算をしたりして研究をはじめて、早くも40年も経とうとしています。師事した喜安善市先生が大学を去ったこともあり、大学院博士課程からは主として理論研究を行う本多波雄先生の研究室に移りました。その当時国内の研究会に出席すると、先輩の研究者達の間で何を研究すべきかが熱っぽく話し合われておりました。正確ではありませんが、無くしたコインを探すときの次のような会話が、ロシアの諺として話題にのぼっておりました。

「どうして街灯の下を探しているのですか。」

「ここでないと、暗くてわかりません。」

「・・・」

成果が出るからというだけの研究に対する警鐘です。

あれから40年、私に関ってきた分野の発展を振り返りますと、当時は予想もつかないくらい大きく発展したという印象と暗いところは暗いままという印象の2つの異なる思いにかられます。

私自身は、上述の警鐘を念頭におきながら、なるべく広い範囲の現象をコンピュータで実行できる程にきっちり表したい、また、その場合の計算の原理を解明したいという想いで研究を続けてきました。これまでの研究の足跡を紹介します。

主な内容：計算のモデル

計算の限界

計算の可能性

懇 話 会 メ モ

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....